

第72回 企業活性化研究分科会・議事録

<第七二回 2014年10月4日(土) 時間:13:30~17:00 於:専修大学(神田校舎)>

参加者:尼野、井端、大野、小林、夏目、浜田、星野、宮川、山本(9名)

1.テーマ:再生企業の分析-株式会社クリムゾンの場合-

- ・報告者:尼野良
- ・配付資料:8枚
- ・報告内容の要旨

本報告では、株式会社クリムゾン(以下、クリムゾンとする)の企業再生について、粉飾の要因、粉飾発覚前後の期間における財務数値の推移および事業報告の内容から検討をおこなった。

クリムゾンにおける個別の売上高は、2003年度から2006年度まで年々増加傾向にあった。しかし2007年度以降では、前年比40億円程度減収となり、その後は年々減収が続いている。2006年度の売上高185億円に対して2014年度の売上高は9億5千万円までに減少している。次に分析指標からみれば、在庫回転期間月数では、2003年度から2006年度まではほぼ1.3ヶ月であった。2007年度では2ヶ月を上回り、過剰在庫であったことを推定した。

報告者の検討および考察は、売上高の大幅な減少について、クリムゾンの上場後における経営戦略の中心となった小売業態とSPA業態が機能していない点を指摘した。具体的には商品企画・開発能力および市場動向の把握の弱さ等をあげ、これら3点が業績悪化の要因となり、結果として粉飾となる在庫水増し行為にいたったと推察した。水増し行為については、当時の専務取締役、経理担当部門の一部社員以外の者は当該行為の認識はなかったことから、コーポレート・ガバナンス体制の不備を指摘した。以上のことから、クリムゾンの企業再生には組織構造の改善、コーポレート・ガバナンス体制の改善が必要であると考察した。

報告者の考察に対し再生論にかかる討議では次の疑問や課題が生じた。第一に、売上高の増収率について、2005年度を上場初年度とした場合、上場直後から低下傾向にあることである。第二に、粉飾年度前の期間では営業利益12億円、当期純利益6億4千万円を計上しているにもかかわらず粉飾に至った理由の究明が必要な点である。第三に、2009年度を最後に5年間連続で最終赤字を計上し、2012年度には債務超過となった。債務超過になってから追加資金を投下したが2年後には再び債務超過となった点である。したがって、企業再生の視点からは、継続企業の前提に疑義がもたれるのではないかとの議論がなされた。クリムゾンは売上高の大幅な減少、5年間連続の赤字計上等で業績悪化し続けている。それにもかかわらず、香港企業が当社に対して更なる投資を計画していることが疑問であり、クリムゾンの動向、香港企業の動向を注意して分析研究を続ける必要性の確認をした。

2.今後の予定について

- ・2014年11月22日(土) 分析企業-株式会社イチケン- 浜田先生
- ・2014年12月6日(土) 分析企業-椿本興業株式会社- 小林先生

(文責:浜田勇毅)